

## Part 1 ABOUT LOVE AND TIME

### Ah, je t'aime ...

クラシックとジャズの世界を自在に行き来し、アレンジャーとしても名高いチャー・タイシンの「前奏曲 “La femme c'est moi”」は、まさに本プログラムの幕開けにふさわしい音楽。「あなたの声に私の心も開く」は、サン＝サーンスの歌劇《サムソンとデリラ》第2幕における、デリラのとろけるような愛のアリア。1948年にブロードウェイで初演されたミュージカル《キス・ミー・ケイト》は、トニー賞も受賞したコール・ポーターの代表作。劇中でリリーが歌う「アイ・ヘイト・メン」は、コミカルなナンバー。

### What ... is ... love ...?

「恋は野の鳥」は、ビゼーの代表作、歌劇《カルメン》第1幕で、ヒロインのカルメンが歌う有名なアリア。「ザッツ・アモーレ」は、アメリカの俳優・歌手ディーン・マーチンのイタリア風味のヒット・ナンバー。現代的な恋愛にまつわる風景を描く、ブリテンの《4つのキャバレー・ソング》は、詩人ウイスタン・ヒュー・オーデンとの出会いから生まれた。その第1曲「恋の真実を言って」は、キャバレーの雰囲気満ちたウィットに富んだ歌。

### Cupid's Arrows

アンドリュー・ロイド・ウェバーが作曲した「私はイエスがわからない」は、キリスト最後の7日間を描いたロック・ミュージカル《ジーザス・クライスト・スーパースター》で、マグダラのマリアが歌うラブ・ソング。「糸を紡ぐグレートヒェン」は、シューベルト最初のゲーテ歌曲。グレートヒェンとは、ゲーテの戯曲『ファウスト』に登場する薄幸のヒロイン。「あの人が消えた」の原曲は、マイケル・ジャクソンのアルバム『オフ・ザ・ウォール』（1979年）の「あの娘が消えた」。作詞・作曲はトム・バーラーで、のちに主人公の性別を変えてこのバージョンが生まれた。「暗い日曜日」は、ハンガリーのシンガーソングライター、シェレシュ・レジェーが1933年に発表した作品。あまりに内容が暗いため、放送禁止曲に指定された、いわくつきの歌である。「愛の喜びは露と消え」は、モーツァルトの歌劇《魔笛》第2幕で、王子タミーノに嫌われたと勘違いして悲しむ、夜の女王の娘パミーナのアリア。シューベルトの歌曲「死と乙女」は、死に瀕した娘と死神との対話を描く。

### With a Smile in Your Heart

「でも、時は不思議なもの」は、R. シュトラウスの歌劇《ばらの騎士》第1幕終盤で、マルシャリン（元帥夫人）が歌う、年上の悲哀を嘆く歌。「ホエン・アイム・シックスティーン・フォー」は、ビートルズのアルバム『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハ

ーツ・クラブ・バンド』(1967年)の収録曲で、ディキシーランド・ジャズ風のラブ・ソング。

## Part 2 VIOLENCE AND SALVATION

### Fricka-Dellen

楽劇《ワルキューレ》は、ワーグナー畢生の大作『ニーベルングの指環』(4部作)の第2作。「ワルキューレの騎行」は、第3幕の冒頭、ヴォータンの娘である8人のワルキューレが結集するシーンを描いている。「復讐の炎は地獄のように我が胸に燃え」は、モーツァルトの歌劇《魔笛》第2幕で、夜の女王が歌う超絶技巧を要するアリア。「それならば、永遠の神々はもうお仕舞なのですか」は、楽劇《ワルキューレ》第2幕で、勝利の代わりにジークムントに死を与えよと、フリッカがヴォータンに迫る。この他にもワーグナーのオペラから名場面を抜粋してお届けする。「諸君の乾杯を喜んで受けよう」は、ビゼーの歌劇《カルメン》第2幕で、闘牛士エスカミーリョが歌う勇壮なアリア。

### Peace ?

「おお友よ、このような調べではない!」は、ベートーヴェンの《第九》第4楽章、独唱・合唱が始まる後半部分の冒頭で、まるでベートーヴェン自身の言葉のように響き渡るレチタティーヴォ。シューベルトの代表的な歌曲「魔王」では、父と子と魔王の緊迫したセリフがドラマティックに絡み合う。「どこかへ」は、レナード・バーンスタインのブロードウェイ・ミュージカル《ウェスト・サイド物語》第2幕で、ある少女によって歌われる、恋人たちの儚い夢の世界を象徴する歌。《三文オペラ》は、ベルトルト・ブレヒト原作の戯曲にクルト・ワイルが音楽をつけた全3幕の音楽劇。「海賊ジェニー」は、その第1幕でポリーが歌う余興の歌。

### Miss Saleboli

「呪われし美貌」は、ヴェルディの歌劇《ドン・カルロ》第4幕で、王妃付きの女官エボリ公女が歌う懺悔のアリア。「ミス・オーティス・リグレッツ」は、コール・ポーターの作詞・作曲による1934年の作品。オーティス嬢がなぜランチに現れなかったのか、その驚愕の落ちが面白い。R. シュトラウスの歌劇《サロメ》は、オスカー・ワイルドの戯曲が原作。その最終場、「7つのヴェールの踊り」の音楽をバックに、サロメが官能的な踊りを披露する。「水に流して」は、シャルル・デュモンが1956年に発表したシャンソン。エディット・ピアフの歌でヒットし、現在に至るまで歌い継がれている名曲である。